（様式１）

学力向上のための重点プラン【小学校】

新宿区立落合第二小学校

■　学校の共通目標

授業作り	重点	・授業のめあてを明確にし、学習の見通しをもたせる。学習活動を焦点化し、ｽﾓｰﾙｽﾃｯﾌﾟの設定、ICT 機器の活用、視覚的手がかりを基に、理解を図る。学び合う場面を多く設定し、思考の共有化を重ねる。	中間評価	・各学年学級指導、習熟度別指導などにおいて、継続的・効果的な ICT 機器活用を考え、オンライン上での交流の場を意図的に増やしたことで、互いの意見に関心をもち、学習を深めようとする児童の姿が見られた。	最終評価	・年間を通し、継続的・効果的な ICT 機器の活用した学び合う場を設けることで、基礎学力の定着に加え、表現力や活用力の向上が見られた。「漢字の書き」に関しては、さらに指導を改善し、児童の基礎的な力を高める必要がある。
環境作り		・教室前面の視覚的刺激を調整し、時間の視覚化や本時、単元の予定などの見通しを提示するなど、児童が学びやすい環境を整える。ﾀﾌﾞﾚｯﾄ端末の活用、個に応じた教材の準備など、一人一人に応じた個別の配慮を行う		・学習の導入を工夫したり、児童の考え方から学習のめあてをもったり、問題解決型の学習を進めることで学習意欲の向上が見られた。タブレット端末を用いて、個に適した問題や資料の提示ができるように進めている。		・学習内容や既習事項を掲示することで、学習への見通しをもち、学びを自覚しながら学習に取り組む児童の姿が見られた。ﾀﾌﾞﾚｯﾄ端末を活用し、個に応じた指導をより充実させていくことができた。

■　学年の取組内容

学年	教科	学習状況の分析（10 月）	課　題（10 月）	改善のための取組（10 月）	最終評価（２月）
1	国語	学正しい平仮名の習得や、助詞の使い方はまだ不十分である。 学語彙力を増やし、文の中で適切に活用することが不十分である。	・特に促音、助詞の使い方と発音について、繰り返し音読したり、書いたりする練習を行い、適切に活用できるように指導を続けていく必要がある。 ・「言葉の宝箱」を活用し、一つの単元の中で言葉を集める学習を積極的に取り組めるよう、視写の活動を継続して指導していく必要がある。	・音読は毎日の課題として取り組ませる。また、週に１時間程度視写の時間を取り、丁寧に文章を書くことで、書くことの楽しさを味わわせる。 ・児童が見付けた言葉を「言葉の宝箱」のタブレットに保存して共有したりするなど、いろいろな言葉に慣れ親しむようにする。	学平仮名や片仮名、漢字を習得し、字形を整えて正しく書ける児童が増えてきた。言葉遊びを通して拗音や助詞の正しい使い方も定着しつつある。しかし、作文や紹介文などの長い文章を正しく書くことや、言葉のまとまりを意識した作文については、まだ定着が不十分である。視写を繰り返し練習させることで、さらに定着させ、「書く力」の習得を目指す。 学教室に掲示してある語彙表を活用したことで語彙への興味・関心が高まってきた。言葉遊びを通して言葉の意味を推測して文を完成させたり、習得した言葉を積極的に活用したりすることができるようになってきた。また、話し方のモデル文を見て、相槌を打ちながら話を聞く姿も見られた。今後も国語だけでなく、様々な場面で身に付けた語彙力を生かす力を伸ばしていく。
	算数	学数の構成は少しずつ身に付いてきているが、算数ブロックなどの具体物を用いないと計算できない場面がある。 学文章問題では、最後まで文章を読んでいないことがあり、読み取りが不十分で誤りが目立つ。	・１から２０までの数の構成は身に付いてきているので、たし算、ひき算を繰り返し行うことで、正確に計算できる力を伸ばす必要がある。 ・さまざまな文章問題を正確に読み取り、立式と単位を含めた答えを出せるように指導する必要がある。	・計算カードや、タブレットのデジタルドリルを用いて、たし算と、ひき算の練習を繰り返し行うことで習熟を図る。 ・文書を丁寧に読み込み、大切な場所にアンダーラインを引くなどの指導を行い、立式のヒントを自分で見付けられるようにする。 ・さまざまな形式の文章問題を用意して、一つ一つの問題に対して丁寧に読み取ることに慣れるようにする。	学算数ブロックなどの具体物を操作しながら、考える活動を繰り返し行うことで、数の構成や位、２桁と１桁の繰り上がりのあるたし算や、さくらんぼ方式を使った繰り下がりのあるひき算の理解が深まってきた。また、タブレット端末のデジタルドリルや計算カードでたし算やひき算の練習を繰り返し行うことで、正確に素早く計算する力が身に付いてきた。しかし、１０を意識した計算をすることに苦手意識を感じている児童もいる。継続して、プリントやデジタルドリルを活用して習熟を図っていく必要がある。 学文章問題を読み、分かっていることや聞いていることなど、必要な個所に線を引いたり、問題を図に表したりすることで、問題を正しく理解し、立式できるようになってきた。しかし、適用問題や応用問題では、問題の意味を正しく読み取れず立式してしまう場面が見られるため、様々な問題を解いていくことで適用する力を身に付ける必要がある。デジタルドリルをはじめ、練習プリントなどを活用して復習に取り組む。

学年	教科	学習状況の分析（４月）	課　題（４月）	改善のための取組（４月）	中間評価・追加する取組（10 月）	最終評価（２月）
2	国語	学ひらがな・カタカナについては正確に書けるようになってきているが、漢字については、正確に書ける児童と定着が不十分な児童に、力の差ができている。 学自分で考えて文章を書くことが難しい場面が見られる。 学語彙の習得が少なく、文章を読解する力が十分ではない。	・字形にも気を付けて丁寧に、かつ正確に漢字を書けるように指導していく必要がある。 ・言葉自体の理解や自分で考えたことを文章に書き表す力を伸ばしていく必要がある。 ・言葉の意味を捉える力・読解力について、継続的に指導していく必要がある。	・授業や家庭学習において、デジタルドリル等を用いて漢字の反復練習の時間を計画的に位置付け、取り組ませる。 ・「書くこと」の学習の一環として、視写や文章構成を考えた文章を書く等の活動を継続的に取り入れ、児童同士の交流も取り入れながら表現力を高めていく。 ・音読カードも利用しながら音読に継続的に取り組み、読書の機会を増やしたり、「言葉の宝箱」（語彙表）を必要に応じて利用したりすることで語彙力を高める。	・デジタルドリルの筆順機能を活用し、丁寧に書くことができている。普段のノートや文章などを書く際も既習漢字を活用させる。 ・文の型や例文を示すことで、スムーズに文章を書ける児童が増えてきた。長い文章を書くため、構成メモを書き、児童同士で交流しアドバイスし合う機会を設ける。 ・新しい言葉が出たときなど、日常場面での活用の仕方を指導し語彙を増やすことができた。読み聞かせや読書の機会を増やし、本に親しみながら読解力をさらに高めていく。	調新宿区学力定着度調査では全体の校内平均正答率が８７．９％で全国平均正答率の８３．９％を４ポイント上回っている。家庭学習や毎時間の導入等で、漢字練習に継続的に取り組ませてきた。その結果、漢字の知識理解が定着してきた。引き続き、継続的に取り組んでいく。 調「書くこと」では、型の提示や、繰り返し児童同士で交流し文を読み合うことで、意欲的に取り組むようになった。新宿区学力定着度調査では「書くこと」の領域では大幅に目標値を上回った。しかし、「話すこと・聞くこと」は全国平均より低く、特に聞き取ったことを書く設問では既定の字数に到達していない児童が多く見られた。朝の会や帰りの会などのスピーチ活動に加え、互いに話をする時間を設けると共に、授業の中でも友達の考えや意見をしっかりと聞く機会を設ける。 学語彙表を活用し、新しい言葉を使って文を書く練習をしてきたことで、表現力がさらに高まった。他教科での活用も進めていく。

	算数	学練習問題では、具体物を活用したり、既習事項を確認しながら反復したりして問題練習することで、計算の技能や基礎的な知識・理解が徐々に高まっている。	・計算の技能や知識・理解に個人差が見られる。既習事項をもとにしながら繰り返し計算練習を行っていく必要がある。	・授業の始めに、関連する内容の既習事項の計算に触れて、問題に対する抵抗感をなくして課題に取り組みやすくしていく。また授業や家庭学習の中で、個に応じてドリルやプリント、デジタルドリルなどで反復しながら、苦手な問題に取り組む指導を継続していく。	・既習事項の計算を繰り返し学習し計算がスムーズにできるようになっている。また学習したことを教室横や後ろの壁面へ掲示し、常に目につくようにし、定着を図っている。加えてデジタルドリルを活用し、個々の習熟度に合わせて定着を図る。	調校内平均正答率が７９．７％で全国平均正答率の７５．４％を４．３ポイント上回っている。デジタルドリルや東京ベーシック・ドリル等で既習事項を繰り返し学習したことで、基礎学力が定着した。今後も授業開始時や習熟に応じたデジタルドリルの活用を進めていく。
		学文章問題で問われていることを理解し、自力で解くことが難しい場面がある。	・文章問題で問われていることが理解できず、順序に沿って解くことが難しい児童がいる。何を答えるのか、どのように立式して答えを求めるかを指導していく必要がある。	・「①授業の中で具体物を活用したり例を挙げたりする。」、「②『分かっていること』と『求めること』は何かを明確にする。」、２点を実施していくことで、文章問題を正しく読み取る力を付けていく。	・文章から内容を読み取る際、誤読してしまうことがあるため、注目すべき言葉を確認し繰り返し指導する。式だけでなく、言葉や図を使って考えを示すことができるように指導する。	調かけ算検定や反復練習等をさせることで成果が出た。校内平均正答率は８５．５％で、目標値より３．５ポイント高い。しかし、かけ算の立式での誤答が目立った。１つ分×いくつ分の意味の定着を徹底して３年生へとつなげていく。
		学文章問題で式を立てることはできるが、自分の考えを表現することに苦手意識をもっている児童がいる。	・式の立て方や問題の解き方について、自分の考えを説明する力に課題がある。自分の考えを発表する場面を多く設定していく必要がある。	・授業の中で、ノートに自分の考えを書いたり、ペアや全体で考えを共有したりする場面を多く設定する。また、自分の考えを示すための話型を示し、話合いが苦手な児童の抵抗感を減らす。	・多くの文章問題に触れ、その都度立式の根拠になる言葉をペアで話し合わせてから全体で確認するようにしている。自分の考えに自信をもつことで、どの児童もすすんで表現できるようになってきている。	学練習問題や家庭学習にて文章問題に多く取り組んだことで、問題文で分かっていることや、求めていることが何かを正しく判断できるようになった。また図に表すことで、数量関係の理解が深まった。今後も文章問題の解決に向け、図や記号などを用いて表現する活動を取り入れ、さらに理解を深めていく。
３	国語	調「文章を書く」について、全国平均と比較すると 13 ポイント下回る結果となった。特に、指定された長さで文章を書いているという項目については目標値から大きく下回る結果であった。	・語彙が少なく、物語を読む中でも「こしらえる」「えりすぐり」などの言葉の意味が分からないため、深く文章を読むことができていない。語彙力を増やしていく工夫を取り入れる必要がある。	・国語辞典の使い方をマスターし、分からない語が出てきたときに国語辞典を引く習慣を付け、語彙力を高めていく。また、漢字学習で熟語に触れる機会を作り、熟語の意味を確認したり、「言葉の宝箱」（語彙表）を活用したりしながら、適切に言葉をつかえるように指導していく。	・「言葉の宝箱」を活用し語彙を少しずつ蓄積し活用することができている。また国語辞典の使い方も学習したが、まだ辞典を引くことが習慣化できていない。毎単元の一番最初の時間に、国語辞典を引く活動を必ず入れるようにしていく。	調漢字の読みについては正答率９７．５％と多くの児童が身に付いている。その反面、漢字の書きについては７７．５％と読みに比べると大幅に落ちる。漢字の理解はしているものの、ひらがなを漢字に変換するときに分からなくなってしまう児童が多いと考える。漢字練習だけでなく、テスト形式の問題の反復練習を行い、漢字を書く力の定着を図る。
		調「お話を考える」については、67.7 ポイントと平均値や目標値を上回っている。特に語と語の続き方に注意しながら文章を書く力に課題があると考えられる。	・文と文のつながりを意識して文章を書く力が弱い。主語と述語の関係性を意識して文章を書かせることや接続詞を活用して文章に厚みをもたせる指導が必要である。	・物語を作ったり、日記を書いたりすることで文章を書く習慣を付ける。また、本をたくさん読む機会を設け、様々な文体の本と触れ合うことで文章の成り立ちや言葉の使い方を覚え、正しく文章を書くことができるようにする。	・宿題で日記の指導を定期的に行っている。また、読書貯金箱で本をたくさん読む習慣作りにも取り組んでいる。段落構成を意識した文章を書くことについては、まだまだ課題が多い。はじめ・中・おわりの段落構成を意識して４００字程度の日記を毎回かけるように指導していく。	調「情報の扱い方」については正答率８１．７％と新宿区の値よりも２．６％低い結果となっている。「説明的な文章」についても６３．３％と低い値となっているため、説明文に対して苦手意識があると考える。はじめ、中、終わりの文章構成を捉え、筆者の考えを正確に掴む力を付けさせたい。そのために、科学などの読み物、文章をたくさん読む機会を設けたり、朝読書の習慣をつけたりして、日頃から要点を掴む練習をしていく必要がある。
		学 漢字については細かいところの間違いが多い。また、熟語などの意味を把握している児童が少なく、語彙力を高める必要がある。	・漢字の止め・はね・はらいなど、細かい部分まで正しく書けていないことや、既習の漢字を活用して文を書くこと、熟語を文章の中で活用できていないことが課題である。	・普段の学習から、既習の漢字を用いて文を書くように、継続的に指導する。また、デジタルドリル等を用いて漢字の反復練習の時間を計画的に設け取り組ませる。	・どの教科でも既習漢字を使用させ定着に努めている。字形のバランス、とめ・はね・はらい等に気を付けて書くことができるように、全体で字のポイントを確認しながら、丁寧に指導をしていく。	学日記の指導を毎週行っていることで、文章を書く力がついてきている。長く文章を書くことに、抵抗ない児童も増えている。また、短くまとめる力もついてきており、２００～４００字で考えをまとめる力がついている。引き続き継続し、書く力の向上を図る。
	算数	調「かけ算の文章問題」について、全国の平均正答率と比較すると、5 ポイント下回っている。2 の段や 3 の段の九九に関しては 96%出来ているが、乗法九九を適応して立式する問題については課題残る。	・特に、かけ算九九の６、７、８、９の段の定着に課題が見られる児童がおり、既習内容についてもさらに定着を図ることが課題である。	・毎日かけ算のます計算を課題に出し、かけ算の定着を図り、わり算の学習に進めるようにする。また、朝の時間や家庭学習でもデジタルドリルを活用し基礎・基本の学力の定着を図る。	・2 学期からは、かけ算だけでなく、わり算などもます計算に取り入れ、毎日行ったことで、四則計算が定着している。今後も継続していく。	調教科総合の正答率が８２％と、全国の平均を１０％以上上回っている。毎日かけ算の計算問題に取り組んできたことや、図形やわり算などの単元で、ＩＣＴ機器を活用し視覚的に理解できるようにしたことで基礎学力や思考力の向上が見られた。
		調記述式の問題では、全国平均や目標値を上回るものの、無回答が 20 パーセントを前後見られるなど、課題が残る。特にたし算の「何十の数の和を求めて、示された金額で買えるかどうかを判断し、その理由を説明する」という問題の解答率が低い結果であった。	・文章をしっかり読み解く力、それに対する自分の考えの根拠をもって説明できる力を伸ばす必要がある。	・ICT を活用し、文章を絵や図で表し場面を具体的に想像しながら問題を把握できるようにする。また自分の考えを、しっかり文章で書き、互いに伝え合うなど説明する機会を多く設ける。	・教科書の挿絵や ICT 機器を活用することで、文章問題から正しく立式することができるようになってきているが、わり算の等分除と包含除の違いについては丁寧に問題文を読み取り指導する必要がある。3 学期の「□を使った式」の学習や復習をする際に、もう一度 ICT を活用して、具体的な操作などを取り入れることでわり算の意味をより理解できるようにする。	調どの単元でも正答率が全国平均、新宿区平均を上回っている。特に「応用」の問題においては、新宿の平均を１０％以上上回っている。今後も文章問題を読み解く時間や自分の考えを文章や図に表す時間を十分に確保していく。来年度においては、理科や学活など他教科の学習との結びつけをさらに行うことで算数の良さを感じながら学習に取り組めるようにする。
		学授業や課題の取り組みを見ると、学習意欲の高い児童が多く、意欲的に取り組んでいる。しかし、時刻と時間の求め方の学習では、既習事項を生かして取り組む児童がいる一方で、分と秒の概念が定着せず課題が残る児童も少なくない。	・時間の読み方が身に付いていない児童もいるので、実体験を基に考えたり、実感を伴って理解ができるような手立てを工夫したりする必要がある。	・時計など具体物を用いて、丁寧に指導する必要がある。さらに、具体物を用いて互いに問題を作って出し合うなど、繰り返し定着を図る。	・1 学期に学習した「時刻と時間の求め方」のテストでは、知識・技能面で 90%近く点数をとることができている。日常生活などで、時計を意識しながら行動することで、さらに分や秒の概念を定着できるようにする。	学「時刻と時間」の単元も全国平均を１０％以上上回っており、時間を日ごろから意識しながら行動することで、時間の感覚や概念の定着を図ることが出来た。

4	国語	調「説明文の内容を読み取る」については、「叙述を基に段落の内容を捉えている」が 82.3 ポイントと目標値を 12.3 ポイント上回った。毎回の説明文の単元で段落構成をおさえていた成果と考えられる。一方で「物語の内容を読み取る」については、「登場人物の気持ちについて叙述を基に捉えている」の正答率が 67.2 で目標値を 7.8 ポイント下回っている。全体の中では低い数値になっている。	・物語文の読解において、内容を丁寧に読み取るとともに、場面ごとに、登場人物の行動・様子から気持ちを想像して、読み取る力をつけていく必要がある。 また、ポイントとなるキーワードを見付ける活動を取り入れるなど、内容を正確に読み取る力を伸ばす必要がある。	・叙述の細かい部分に着目した読み方だけでなく、中心人物の気持ちの変化や場面の移り変わりに着目した読みを繰り返し、物語・説明文の読解力を定着させる。	・情景描写や会話等の表現や叙述に注目し、登場人物の気持ちを想像して読むことについて指導する必要がある。毎回の授業の中で、「気持ちを表す言葉」に着目させ、複数の叙述に結び付けて考えるようにする。	調叙述に常に着目して読み取らせたり、「説明文」については、文章構成のパターンをつかませたりしたことで、文章の正しい読み取りにつなげることができた。一方で、初見の文章については、物語文、説明文ともに正答率が６割程度と低くなっているので、今後はキーワードを探したり、要約したりするなどの指導を丁寧に行う。
		調「漢字の読み・書き・言語の学習」については、全体的に正答率が目標値を上回っており、定着が見られる。	・漢字の読み書きや言語に関する知識技能においては、学習への取り組み方が身に付いている児童と、身に付いてない児童の差が大きい。	・学習への取り組み方が身に付いていない児童には、具体的な取り組み方を丁寧に示すと同時に、デジタルドリルなど個別に家庭学習や漢字の読み書き等に関する学習の課題を設定して、繰り返し取り組めるようにする。	・漢字の読み書きをより確実にできるようにする。漢字の小テスト後に、デジタルドリル等を使って復習の時間を確保し、間違えたところを直し必ず提出させる。	調漢字の読みの正答率は、９２．９％と高かったが、漢字の書きについては６２．２％と低い。今後も、プリント学習とデジタルドリル、視写など場面に応じて併用したことで、知識の定着を図る。
		調「文章を書く」については、校内の正答率が 47.4 と低く、目標値を 17.6 ポイント下回っている。	・書く力に関して、日記など体験したことを書く力は定着が見られるが、指定されたテーマについて自分の考えを書く力が課題である。様々な場面や形式で考えを書く機会を設ける必要がある。	・何について書くのか視点を明確に示し、書き出しの例を示すことで書き方を身に付けさせる。他教科でも広く、自分の考えを書く場を意図的に設定する。	・調べたことを基に、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして書くことについて引き続き指導する必要がある。必要な情報や文章構成について考えさせ、文字量の目安を示すなどして、要約にまとめられるようにしていく。	調書く前の段階で友達と交流する場面を設けたことで、書くことに苦手意識のある児童も、自分の考えを書けるようになってきた。しかし事実を要約することや自分の考えを短くまとめることに課題がある。「書くこと」の正答率が３１．６％と低い。必要なキーワードに注目させ、短い言葉で文を書く活動を日常的に取り入れるなど、書くことの経験を積み重ねていく。
		学辞書を活用する場面を日常的に取り入れたことで、使い方を理解し、語彙力、表現力の向上を図ることができた。	・設定された場面では辞書を使用することができているが、日々の学習の中で自主的に辞書を活用できている児童は少ない。言語能力の向上を図る必要がある。	・国語を中心に、他教科でも学習の際は、常に辞書を近くに置くようにし、必要な場面で自ら調べられるようにする。 またタブレット端末でも視覚的に調べるように促す。	・日々の学習で辞書の使い方は身に付いてきたため、百科事典なども活用し、語彙力、表現力などの言語能力を高めていく。	学辞書を引く習慣が身に付き、言葉に興味をもつ児童がいる一方で、辞書を活用しきれていない児童がいる。引き続き国語以外の時間も辞書を活用した指導を行っていく。
	算数	調全体の校内正答率が 69 ポイントと、目標値の 67 ポイントを２ポイント上回っている。継続して復習問題に取り組ませ、既習事項の定着を図る必要がある。	・桁数の多い筆算において、計算の仕方は理解できているが、九九や繰り上がり繰り下がりの計算の定着が不十分なために誤答が多い。	・筆算の計算問題は、定期的に家庭学習などでデジタルドリルを活用し、繰り返し取り組み、定着を図る。	・筆算の計算問題については、各学級の家庭学習に加え、習熟度別担当から出題されるプリントも毎日行っている。その結果、かけ算・わり算の筆算の正答率が高まってきている。	調知識・技能では３．３ポイント、思考・判断・表現では１４．４ポイントと目標値を上回った。東京ベーシック・ドリルを定期的に取り入れて既習事項の定着を図ったことで、学習内容の理解につなげることができた。
		調たし算・ひき算（３けたや４けた）は、校内正答率が目標値を上回っている。一方で、計算の仕方の説明や、答えの求め方の説明では、校内正答率が 38.6 ポイントと 6.4 ポイント下回っている。	・計算の仕方の説明や、答えの求め方の説明など、自分の考えを分かりやすく説明することに課題がある。	・計算の仕方の説明や、答えの求め方の説明等、今後も自分の考えを説明する学習機会を多く設ける。	・ペアやグループ活動を適宜取り入れることで、自分の考えを説明することが得意でない児童も徐々に説明できるようになってきている。今後も教科書の挿絵や ICT を活用しながら児童一人一人がじっくり考える時間を盛り込んでいく。	学タブレット端末の「発表ノート」の活用をはじめ、たくさんの友達と考えを交流するなどの学習活動の工夫を多く取り入れたことで、自分の考えを分かりやすく書く力や説明の仕方が身に付いた。
		学デジタルドリルや計算ドリルを継続したことで、既習事項の定着を図ることができた。また、コンパスや定規などの操作経験を積ませたことで、作図に関して技能の定着が見られた（コンパスアート等）。	・コンパスや定規の操作においては、定着している児童と定着していない児童の差が大きいことが課題である。	・教具の操作活動を多く取り入れるなど、作図の技能を高める。また、「文章問題や応用問題」「繰り下がりのひき算と九九」については、習熟に応じた指導を通して、正しく読み解いたり計算したりする力を伸ばしていく。	・コンパスや定規の操作においては、平行四辺形やひし形、立方体や直方体の作図の機会を多く取り入れ、定着を図る。家庭学習にも作図の復習を定期的に取り入れていく。	調図形は目標値を４．５ポイント下回った。コンパスや三角定規を使った作図は繰り返し取り組むことで、技能を習得できるよう取り組ませた。しかし、時間が経つと忘れてしまうので、定期的に取り組ませていく。用具を活用した模様作りなどを通して、定着を図る。
5	国語	調「書くこと」の領域で正答率が低く、全国平均と比べ 12 ポイント下回っている。無解答も 22 ポイント以上いたので時間配分に課題があると考える。一方で、「読むこと」は、物語文・説明文いづれも目標値を上回っている。	・書くことに対しての苦手意識のある児童が多い。また決められた時間で、文章を書く機会が十分でないので、時間内に限られた文字数や、決められたテーマに基づき考えをまとめて書くことができるように指導をする必要がある。	・時間や字数を決めて書く機会を増やしたり、文体に合わせた表現方法を指導したりすることで、書くことに慣れるようにする。また、日記や作文、振り返り文などの課題を出し、内容の中心を明確にしながら、詳しく具体的に書く力を高める。	・朝学習では、視写の学習を継続して行っている。長文を書くことには抵抗がある児童も、短時間で集中して視写をすることに少しずつ慣れてきた。自分の考えを詳しく、具体的に書くことには課題が残る。文末の表現や、話型を提示することで、伝えたいことを詳しく書けるようにしていく。	調「書くこと」の領域では正答率が４５％で全国平均より約１０ポイント高い。朝学習や国語の時間に短作文を繰り返し書くことを積み重ねてきたことで、書くことへの抵抗が少なくなり、力が付いてきた。しかし、自分の考えを具体的に書いたり、筆者の考えを要約して書いたりといった、応用力が十分でない。モデル文を示しながらさらに書く指導が必要である。
		調「言語の学習」の問題では、主語と述語の関係の理解が 54.7 ポイントで、目標値を約 11 ポイント下回っている。	・誤答傾向から、主語・述語・修飾語の関係を理解ができていない児童が多かった。主語・述語・修飾語の関係を意識した文作りや読み取りの経験が少ないことが課題である。	・文作りを通して、主語・述語、連体修飾語等の理解を図る。その際、「言葉の宝箱」（語彙表）や国語辞典を積極的に活用して、語彙力を高める。	・文章を書く際、文が長く分かりにくい内容になってしまったり、文章のねじれから意味が通らなかったりすることがある。推敲するポイントを明示し、継続的に指導を続ける。	調「言語についての知識・理解・技能」の観点で、基礎的な漢字の読みや敬語の使い方については、どれも全国平均を上回った。しかし、漢字の書きについては、全国平均を４．４ポイント下回り、課題が残る。タブレット端末での学習に偏らず、実際に書く場面も積極的に取り入れる必要がある。
		学習得した漢字を活用したり、文を長く詳しく書いたりすることが苦手な児童が多い。	・既習の言語事項について、習熟を深める言語活動に取り組む必要がある。	・既習の言語事項を振り返ることができるプリントやデジタルドリルの課題に取り組ませる。また、既習の漢字を用いた文作りを行う。	・デジタルドリルを活用して、漢字練習を毎日継続的に行っている。習得した漢字を用いて、文を書いたり、熟語を考えたりすることへの意欲が高まってきている。	学デジタルドリルと、プリントやノートでの学習を併用したが、漢字の習得には個人差がかなり大きい。個人に合った方法で練習ができるよう、練習方法の選択肢を広げていく必要がある。

	算数	調各領域、全国平均と比べて、平均値をやや上回っている。内容別に見ると「小数」の問題が、他の問題よりも正答率が低い傾向く、区の平均よりも４ポイント低い。 調「億と兆、概数」の問題では、読み取り方や数直線に示された数を表すことは、全国平均とほぼ同様であるが、概数を求める問題では約 13 ポイント下回った。 学文章問題や応用問題において、立式をしたり、順序よく解いたりすることが苦手な児童が多い	・小数のしくみについての理解が不十分である。また、基礎的な計算力がまだ不十分な児童もおり、学習に必要な計算力について習熟する必要がある。 ・概数を使って答える問題では、四捨五入の方法や位について丁寧に確認をしながら読み取る必要がある。 ・立式に苦手意識をもつ児童が多く、文章中から根拠を見つけたり、数直線を活用したりして、考えさせる必要がある。また、例を示しながら、応用問題も順序良く解くことでこれまでの学びを生かせることに気付けるようにする。	・家庭学習を通して４年生の小数の問題を復習する。また、短時間でできる小数の計算プリントやデジタルドリルを授業開始時や終了時に継続的に取り組ませる。 ・概数を使って答える問題を復習する際、デジタル教科書で教師が示しながら、四捨五入の仕方を再度確認し、自分で説明する力を高める。 ・問題から数直線を描き、それをもとに、立式できるようにする。また、立式に苦手意識をもつ児童には、立式する前に、問題を図解で示したり、デジタル教科書の動画等を用いたりして、視覚的な支援を行うことで定着を図る。	・小数のわり算の筆算を苦手とする児童が多い。授業や家庭学習の中で、プリントやデジタルドリルによる反復学習を行い、小数のわり算の計算の仕方を確認してから、５年生の学習に取り組むことで、スムーズに学習に取り組むことができた。 ・東京ベーシック・ドリルを活用し、概数について学び直す時間を設けた。四捨五入の仕方を忘れてしまう児童もいるが、定期的に確認することで、徐々に定着している。 ・立式をするために、数直線を使って二つの数量の関係を視覚的に示すことを繰り返した。自身でノートに数直線で書き表すことができる児童が増えた一方、まだ定着しない児童もいるので、継続していく。	調小数の計算では、どれも全国平均を上回り基礎的な力が着いてきていると考えられる。しかし、無回答の児童も若干名いた。引き続き、基礎的な知識や技能の定着を進めるとともに、習熟度に応じて、式や文章で説明する場面を適切に設定していく。 調「概数」の設問では、全国平均を１２ポイント上回った。しかし、授業では四捨五入をする位を間違えていたり、問題をよく理解していなかったりする児童が多くみられる。引き続き概数についてデジタルドリルを活用して定着を図る必要がある。 学タブレット端末やノートに自分の考えを表現し、伝え合ったり、数直線や図を用いて式を説明したりすることで、文章問題や応用問題にも意欲的に取り組む児童が増えてきた。
6	国語	調「読むこと」の正答率は、全国平均を５ポイント上回り、定着しつつある。国語への関心意欲は、全国平均よりやや下がるが、ほぼ同等である。 調「書くこと」の正答率は、全国平均よりも３ポイント程低い。昨年よりは改善が見られているが、解答時間が足りずに、最後まで取り組めなかった児童も見られた。 学授業での課題やワークテストの状況から漢字の読みは比較的できるが、漢字を正しく書くことに関しては課題が残る。	・物語の内容よりも、説明文の読み取りへの課題が大きく、情報と情報との関係について理解し、文章の情報を整理することが難しい。 ・「書くこと」について、自分の考えを相手意識や目的意識をもち、豊かに表現したり文章を構成したりする力が十分でない。文章を読んで、まとめた意見を共有したり自分の考えを広げたりすることにも課題が見られる。 ・前学年で配当された漢字を書くことが、十分に定着していない。	・文章の概要を読み取ってから、キーワードとなる言葉を確認し、要点をまとめる力を付ける。また、読書の機会を増やしたり、「言葉の宝箱」（語彙表）を活用したりして語彙力を高め、読解力のさらなる向上を目指す。 ・かきまるタイムや週末のテーマ作文の課題等で、日常的に「書くこと」の活動を設定し、児童同士の交流を行い、表現力を高めていく。構想が難しい児童には、モデル作文を示し、表現の幅を広げられるようにする。また、国語辞典の活用や文章を見直す習慣を付け、語彙力や表現力の向上を図る。 ・ノートや作文の中でも学習した漢字を意識して使えるようにしていく。授業の中でも漢字の復習時間を設けたり、家庭でデジタルドリル等を活用して練習を積み重ねる習慣を付けたりしていく。	・注目させたい言葉や、その言葉が指す図などにマーカーを引かせ、視覚的にも確認しながら読み取りを進める等、工夫している。学習を進めながら、並行読書をしたり読書目標を決めて記録をつけたりする児童も見られる。 ・かきまるタイムの視写は継続的に行い、短時間でも集中して視写できるようになってきている。作文への抵抗も以前より少なくなり。柱立てやモデル作文を見ながら、自力で書き進める力がついてきている。互いに読み合い、推敲する力をつけることを目標とする。 ・国語の授業のはじめの５分間で、復習を行ったり、友達同士で書き取りチェックをし合ったりすることの積み重ねをするようにしているが、なかなか定着が難しい。学習した漢字はテストだけでなく、日頃から使っていくことをこまめに指導していく。	調知識・技能、思考・判断・表現ともに、目標値を大きく上回った。領域別にみても、ほとんどの領域において、全国平均を上回った。「読むこと」において、全ての設問の正答率が全国を上回った。その中でも特に「文章の内容にあてはまらないものを選ぶ」「構成理解」の項目は、正答率が全国平均より１５ポイント以上上回ったので、大まかな内容を理解する力を付けたと考えられる。 調昨年より課題の大きかった「書くこと」においても、正答率が全国平均を６ポイント上回ったことは、１年間の成果と言える。卒業に向けて、自分の考えをまとめて書くという内容が多かったことで、書く機会も増え、自信を付けた。 調単元ごとに見ていくと、物語文や説明文の読み取り、漢字の読みは全国平均を上回るが、漢字の書き取りは平均値とほぼ同じである。書き取りに関しては、漢字テストだけでなく、普段の学習から既習漢字を意識して使う習慣が今後も大切だと考えられる。
	算数	調各領域、全体ともに、全国平均と比べて、平均値とほぼ同様である。 調「小数のかけ算・わり算」は、全国平均を 3.6 ポイント上回った一方で、「分数のたし算・ひき算」は、12.6 ポイント全国平均より下回っており、課題である。 調「単位量当たりの大きさ」「比例」「平均」の問題では、全国平均とほぼ同様であるが、記述式の解答結果は個人差が大きく見られた。 学文章問題を順序よく解いたり、正しく図形を捉えたりすることが苦手な児童が多い。	・基礎的な計算力がまだ不十分な児童もおり、学習に必要な計算力について習熟する必要がある。 ・分数の理解や通分、約分などの技能が十分についていない児童がいる。さらに定着を図る必要がある。 ・単位量当たりの大きさなどの文章題を読み取る力が少しずつ付いている一方で、立式した自分の考えを説明するまでは難しい児童がいる。 ・立式が苦手意識をもつ児童が多く、文章中から根拠を見つけたり、数直線を活用したりして、考えさせる必要がある。また、図形を正しく捉えるために、記号やマークを活用していく必要がある。	・単元ごとに、短時間でできる既習の計算プリントやデジタルドリルを授業開始時や終了時前に継続的に取り組ませる。 ・課題に応じて、復習プリントやデジタルドリルなどに取り組み、授業や家庭学習の中で、学習の定着を図る。東京ベーシック・ドリルの５年生分に取り組む。 ・児童がタブレット端末やノートを活用して、自分の考えを説明したり、考えを伝え合ったりする機会を十分に設け、式や絵図、数直線などを活用して説明する力を伸ばしていく。 ・必要な問題では、絵図や数直線をもとに、立式できるようにする。また、図形に苦手意識をもつ児童には、デジタル教科書の動画を用いて視覚的な支援を行ったり、自身で操作したりしながらイメージをもてるようにしていく。	・授業や家庭学習の中で、プリントやデジタルドリルによる反復の時間を設けてきたことで、基本的な知識の定着や技能の向上が見られた。 ・東京ベーシック・ドリルを活用し、小数、分数など苦手な領域について、学び直す時間を設けたことで、苦手を克服しようと自ら学ぶ児童が増えた。 ・タブレット端末やノートに、数直線や図で書き表すことができる児童が増えた一方、まだ定着しない児童もいるので、自分の考えを説明する場面の設定が確保されるように授業を展開していく。 ・文章題を解く際に、数直線や図をもとに立式できる児童が増えた。デジタル教科書による視覚的な支援が効果的だった。苦手な児童には今後も、数直線に加え、図などでイメージしながら立式できるよう指導を継続する。	調正答率は全国平均と比べ、基礎は同様、応用が９ポイント以上、上回った。学習内容の定着に加え、応用力の向上も見られたが、計算領域は全国平均と同等であり、基礎的な計算力の定着は個別指導が今後も必要である。 調「分数の計算」単元は、全国平均を１.２ポイントほど下回った。分数の足し算引き算よりも、掛け算割り算の正答率が低かったため、計算方法を復習する必要がある。 学習熟度別指導の中で、既習事項を振り返りながら、説明する場面を確保してきたことで、立式できる児童が増えてきた。また、デジタルドリルを活用し、理解の定着を図ることができた。 学学び合う時間を確保したり、図や数直線を活用する習慣を身に付けるように促したりしたことで、文章問題などへの苦手意識が解消された児童が増えた。今後も基礎問題の理解を自信にして、応用問題や文章題に取り組めるように授業を展開していく。

音楽	学表現活動において、自分の思いや意図を表そうとする姿が多く見られる。しかし、音楽を形づくっている要素を使って、自分の思いや意図を言葉で伝えることに課題がある。 学鑑賞活動において、音楽のよさや面白さを感じ取ってはいる。その一方で、共通事項（曲のしかけ）を手掛かりにして、楽曲を味わうことに課題がある。	・強弱や音色、拍など、音楽を形づくっている基本的な要素を十分に理解していない。 ・音楽から聴き取ったことと感じ取ったことを自分の言葉で伝える力に個人差が見られる。	・出来るだけ多く、曲と関わらせながら音楽の用語について理解する機会を設け、音楽を形づくっている要素をつかって言葉での表現力高めていくようにする。さらに自分の思いや意図を友達に伝える場面を設定する。 ・友達と聴き取ったこと感じ取ったことについて共有する場を設け、対話の中で気付きや考えを深めることができるようにする。	・色々な曲を歌い、聴くようにして音楽の用語を繰り返し確認するようにしている。そこからより、自分の意図や考えを伝えられるような表現ができるようになってきている。これからはより実感できるように、表現に繋げていく。 ・聴き取ったこと感じ取ったことを、全員で共有する機会を設けている。自分だけでは気付けなかったことを対話の中で気付くことができている。今後も対話を通して考えを深められるような授業を展開していく。	・導入で多くの楽曲を歌ったり聴いたりする経験を積み、強弱や速度、反復など音楽を形づくっている要素を聴き取り、音楽の要素と自分の思いや意図と繋げて考えられるようになってきた。そこから歌の表現につなげようとする児童が増えた。 ・ペアや学級全体で聴き取ったこと感じ取ったことを共有することにより、互いの考えや意図に気付けるようになった。さらに、感じたことを豊かに表現し、深い学びにつなげられるようにしていく。そのために、ミニ鑑賞を定期的に行っていく。
図工	学表現の活動では、絵や立体、工作へ意欲的に取り組む姿が多く見られる。きっかけがあれば楽しく活動できる一方で、発想することや自分の考えに自信をもつことに課題がある児童が見られる。 学鑑賞の活動では、楽しみながら個々に作品のよいところを見付け、伝え合うことができる。発展として、見方を変えて自分の考えを深めたり、友達の作品から想像を広げたりすることを目指す。	・表したいものが思い付く児童がいる一方で、表現に繋げるための思考や判断などのきっかけが掴めない児童がいる。また、表したいものがあるが、自分の思うように表現できないと感じる児童がいる。 ・一度思いをもつと、そこから違う見方をしたり、イメージを広げたりすることへ意識が向きにくい。	・児童の発想へつながる導入を行うとともに、個別に支援が必要な児童には選択肢を用意したり、教師との会話の中で発想したりできるようにする。また、表したいものを表す力を身に付けるために、道具や材料の体験を充実させ、基礎的・基本的な技術の定着を図るようにする。 ・イメージを明確にするために、造形的な要素に着目させ、感じたことを認識できるようにする。また、友達と共有したり、全体へ発表したりする場を設け、対話の中で気付きや考えを深めることができるようにする。	・思いをもち、より豊かに発想できるよう、導入で具体物を用いたり画用紙や粘土、木、アルミホイルなど様々な材料や道具の体験をしたりできるよう設定した。その結果、児童は自分が表したい色や形を試行錯誤しながら表せるようになってきている。 ・自分の考えや表現に広がりをもつことができるよう、造形的な要素に観点をおいた結果、造形的な要素に着目して振り返ることができるようになってきている。今後も迷いやアイディアを共有し、対話を通して表現の広がりや深まりを得ることができるようにする。	・画用紙や木材、クルミや落ち葉など学校や地域の自然素材を含め、様々な材料に触れることで思いをもち、発想のきっかけとすることができた。今後も振り返りでの価値付けや制作途中の認め合いを通して、スモールステップで自分の思いに自信がもてるようにする。 ・ペアや学級全体でアイディアを共有したり、学習途中で対話式の鑑賞を設けたりすることで、互いの気付きを共有し、思いや考えを広げたり深めたりできる児童が増えた。今後は、さらに感じたことを豊かに言語や創作で表現できるよう、活動の場面や鑑賞を充実させる。
特支	・自分の思いを伝えることに課題をもつ児童が多く、コミュニケーションを通して心を通じ合わせることへの苦手さが見られる。 ・場面を理解したり数の操作をしたりすることに課題をもつ児童が多く個に応じた指導が必要である。	・自分の思い通りにならないと、感情的になったり自信をなくしたりしてしまう傾向が見られる。 ・取り組みの意欲の高まりが見られるが、習熟度に大きな差がある。	・表情カードの選択や適切な気持ちの言葉を日常的に指導し、気持ちよくコミュニケーションがとれた経験を積ませる。 ・児童の実態に応じ、国語・算数ごとにグループ編成を変えて指導を行うと共に、タブレット端末を活用し個に応じた学習指導を行う。	・学級会の時間に勝敗や譲り合いの場面のある様々なゲームに楽しんで取り組む中で、コミュニケーションを学ばせる。 ・高学年を中心に児童の実態に応じ、国語・算数ごとにグループ編成を変えて指導を行っている。学芸会の練習を通して、目線や表情を意識させていくようにする。	・勝ち負けのあるゲームで、負けた時に感情を抑えられない姿は依然みられるが、事前に「負けても怒らない。」などと全体で共有しておくことで、感情的な言動を改善できるようになった。 ・低学年で学習姿勢を身に付け、高学年から習熟度別クラス編成で個々に合わせた学習を展開したことで、全体的に意欲をもって学習に取り組む姿が見られ、個々の学力を伸ばすことができた。

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況　学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト、デジタルドリル等から見える学習の状況　※分量は２ページ以上となってもよい。